

息を物語る山の如き。

然し一、聯盟の改組の事態を收拾することは出来なかつた。同聯盟の幹部職員にして本會の合体を主張する人々は、協調會は産業報國運動の起ると同時に其の使命の大半を果したるを以て産業報國運動強化の爲當然統合すべきである、協調會存続派の主張する如く、これを社會政策研究機關として残存することは無意義であるのみならず、却つて産業報國運動の健全なる發展を阻害する虞れが多分に存在するとして、本會の即時解消論を固持した。之に對して、聯盟の協調會よりの分離を主張する人々は、本會の傳統的精神と使命を堅持して、社會各層に對し中正的立場を固持する協調會の本來の機能の發揮は

時局下愈切要なるものあるを以て本會は益々独自の使命遂行に邁進すべきであるとの信念を堅持した。従つて、可及的速かに本會より聯盟を分離し、分離後は相互に事業分野を劃定し連絡機關を設けて協力すべきであるとの見解を押し、關係諸団体との統合問題に對しては慎重な態度を以て臨み、飽く迄協調會の存続論を主張して解散論と對抗した。その爲めには、協調會は凡ゆる事態に對處して萬遺憾なき陣容を整へるため、確乎たる指導精神並に之に基く事業方針の確立、機構の改組の必要を認められた。斯くて、協調會は解散論、存続論の抗争を繰つて重大なる岐路に立つに至つたのである。

以上に協調會とそれより派生した産業報國聯盟との内